銅賞

「あたりまえ」ってなんだろう？

横須賀学院中学校三年　繁永柚葉

私は東日本大震災を受け、「あたりまえ」について考えるようになった。平成二十三年三月十一日金曜日。「ただいま。」と学校から帰宅したその時、グラグラと揺れを感じた。その時から「あたりまえ」だった事が「あたりまえ」ではなくなった。電気が停まり、ラジオから流れる被害の大きさは、私の想像を遥かに越えるものだった。それを実感したのは、停まっていた電気が通るようになった翌日のテレビの影像を見た瞬間だった。画面には東北の地域が映しだされていた。その姿は変わりはてたものであった。私のおばあちゃんの出身地は岩手県釜石市で、私も釜石に行った事があるが、その時に見た、のどかで自然豊かな街並みは一瞬で津波にのみこまれ、あとかたもなく消えうせていた。

震災から一週間以上が経ち、おばあちゃんの兄と連絡が取れた。「家は流されたけど、みんな生きているよ。」その知らせを聞いて、涙を流しながら「良かった」と一言、ふりしぼり答えていたおばあちゃんの姿。一生忘れる事はないだろう。

震災の後、学校は休みになり、そのまま春休みになった。「あたりまえ」だった学校が「あたりまえ」ではなくなった。一年生から五年生までの在校生が参列する卒業式も、この年は参加出来る五年生が代表で参列する事になり、五年生だった私は卒業式に参列した。今まで「あたりまえ」だった在校生の姿は代表の五年生だけ。卒業式はおこなえたが「卒業生はどんな気持ちだったのだろう？」と考える事がある。

震災によって、今もなお、仮設住宅で暮らす親せきがいる。それでも私は今、こうして不自由なく生活していられる事がどれだけ幸せな事なのだろう。「あたりまえ」なんかじゃないんだ。と思わずにはいられない。次、いつまたこのような震災がおこるかわからない。だからこそ、一日一日を大切に、その日その日に感謝をして生きていきたいと強く思う。

震災がひきおこした被害は計り知れない。福島第一原子力発電所の事故も被害の一つである。放射線は目に見えない。だからどこにどれだけの量の放射線があるのか分からない。それなのになぜ、「福島」「福島」と福島県のものや人が汚染されているだとかと言われなければならなかったのだろうか。

「なぜ？」私はショックを受けた。スーパーに行ったら、福島県産とかいてある野菜や果物だけが他のものよりあきらかに多く売れ残っていた。他の産地のものより安く売っているのに。安全検査に合格しています。と細かく詳しく書いてあったのに。私はなんとも言えない、悲しい気分になった。安全であるし汚染されていない。と国が何度もテレビやラジオなどで伝えているのに。

東日本大震災がおこった時、私は小学生だった。小学校の先生の中にも福島県出身の先生がいた。その先生もまた、すごく悲しい顔をしながらうったえていた姿が強く印象に残っている。「安全だし汚染されてなんかいないよ。震災の後、一週間福島に帰っていたけど、このとおり何もおこっていないよ。」これを聞いた私は何の言葉も出なかった。

時が経ち、私は中学三年生になった。社会科の授業で「人権」のことについて勉強をした。「人権」には「人」の「権利」である。誰もが幸せに生きる権利をもっているのに、どうして誰もが幸せに生きられないのか？世界の「共通の基準」であるはずなのに、どうして誰もが平等ではないのか？…いくら考えてもはっきりとしたこたえは見つからないけど、どうすれば誰もが幸せに、平等に生きられ

るのか？今、自分に少しでもできることがないか考えること、難しいかもしれないけれど、それを実行に移すことはできるのではないかと私は思う。

東日本大震災で大切な人を失った人達。大切な家や物を失った人達。また、「放射線、放射線」と言われ続けた人達。今もなお苦しんでいる人達。どれだけ辛い思いをしなければならないのだろうか。私達は決して忘れてはいけないと思う。

「考えよう相手の気持ち、育てよう思いやりの心」この言葉を胸にとめて、自分がではなく、誰もが「あたりまえ」に、人権が守られる世界を、日本を、私は「あたりまえ」にしていきたい。